熊本学園大学 外国語学部 第18号
英米学科 GAZETTE

令和2年6月
発行・編集
熊本学園大学　外国語学部

巻頭言

赤井　恵子（外国語学部長／教授／日本近代文学）

遠隔授業の準備に追われながら、過去読んできた文学作品の中に、現在のような情況――「はやりやまい」を描いた場面はなかったか、と探している自分に気付きました。泉鏡花「駒の話」という作品に、ある流行病のことが描かれており、ねずみが媒介するその「可厭（いや）な病」の流行ぶりを「火」にたとえてありました。この作品、秋学期の授業で取り扱う予定です。全体は、そのねずみを巧みに退治する「駒」と呼ばれる雌猫の話なのです。そういえば、外出自粛で人通りの絶えた夜の街にどぶねずみがちょろちょろ出現、というニュースも、少し前にテレビで見ました。ため息が出ました。

5月下旬、やや事態は好転した、と言ってよいのでしょうか。どうも私の場合は、何とか冷静でいるために書物を読みあさっているようです。

研究紹介

17世記イギリスの宗教コミュニティにおける言語とアイデンティティの関係

矢冨　弘（講師／英語史・社会言語学）

英語を深く学ぶにつれ「なぜ？」という素朴な疑問を抱くことがある。例えば、いまだに宗教文では三人称単数語尾の古い形である-thや二人称単数代名詞のthouが散見される。これらの言語的特徴は、社会が大変革し、英語にも大きな変化が訪れた初期近代期に遡る。しかし「なぜ？」は解決されない。なぜ宗教文に古い形が残っているのか？誰が、どういう理由でこのような風潮を作り出したのか？この激動の時代を生きた人々は言語変化にどう対応したのであろうか？

私が注目したのは、イギリスの宗教コミュニティである。当時のイギリス国教会は一枚岩とは言い難く、様々な宗教的アイデンティティを内包していた。そこで、彼らの宗教的アイデンティティと彼らの言語使用の先進性との関係を検証した。分析の対象としたのは、25人のイギリス国教会とその周辺の宗教家である。彼らを宗教的アイデンティティと国教会への恭順度合いによって４つのグループ、大別するとアングリカンとピューリタンに分類した。当時は権威主義的なアングリカンが恭順的でないピューリタンを弾圧し、互いの確執は大きく広がっていた。

分析の結果、聖書主義であるピューリタンは言語変化に対して保守的で、新しい語形が一般的になったときにさえ、古い語形を頑に保持している。一方で、当時の文化の中心であった宮廷との結びつきの強かったアングリカンは、言語変化を積極的に受け入れ、言語使用においてピューリタンよりも先進的であった。現在に至る、宗教文での保守的な言語使用は、この時代のピューリタンの言葉遣いが大きく影響を与えていると言える。保守的と括られがちな宗教コミュニティにおいてさえ言語変化への反応は一様ではなく、そこにあるのは無機質な言葉の変化ではなく、人々のアイデンティティを基にした、対抗心などの人間的営みの結果である。

留学先の英国グラスゴー大学は英語史研究の一大拠点。
読書の合間に風そよぐ初夏の方庭にて。

書籍紹介

スーエレン・ホイ『清潔文化の誕生』
紀伊國屋書店（1999）

向井久美子（教授／アメリカ文学）

19世紀の作家ホーソーンを研究していますが、キャラクター論を書く際にも、その時代の社会や文化の背景を調べ、気になった点はできる限り掘り下げます。一見何の関係があるのかと思われる資料まで読みますが、そこで意外な面白い発見をすることがよくあります。本書は、ホーソーンの小説に出てくる、おそらく不潔で臭うだろうと思われる登場人物の清潔感や当時の衛生状態の度合いを知りたいと思い、探していた時に網にかかったものの一冊です。

著者はアメリカのノートルダム大学の歴史学の教授で、19世紀当時のアメリカは「すさまじく汚い」と断言し、その不潔さと悪臭の酷さを、さまざまな角度と背景から論証しながら、興味深い実例を挙げています。パリやロンドンとはまた違った移民大国ならではのラスティックな悪臭や不衛生が横行していたようです。

これまでの経験上、アメリカほど、どこに行ってもシャワーやトイレの水が気持ちよく流れ、悪臭や汚れや生活害虫などに敏感で潔癖な国はないという印象があったので、本書を読んで、よくぞここまで清潔文化を築いていったと感心させられました。何もない荒野を開拓し、様々な文化を取捨選択して、ここまで発展してきた国だからこそ、多くの民族や文化が共存できているのでしょう。今、新型ウイルスによって、世界的に非常に厳しい状況に直面していますが、このような清潔文化を築いた国とも相互に協力しながら、何とか乗り越えていければと祈るばかりです。

カナダ・ヴィクトリア大学訪問

Ostman,David
（講師／英語教育・異文化理解力・異文化コミュニケーション論）

令和２年２月に本学の学生が長期留学するヴィクトリア大学の語学学校を訪問いたしました。20時間以上の移動時間にて溜まった疲れと共にヴイクトリア国際空港の入国審査を抜けると近代的なロビーに出ます。学生の目線を取るためにあえて空港からの交通を調べず、大学まで向かえるか試してみました。文字と絵にて案内標識があるため、バス停へは問題なく行き着けました。すると間もなく都市バスが目の前に現れ、乗ってみると「お元気ですか」とバスの運転手がにこやかに挨拶してくる、とても友好的な雰囲気が感じられました。市内への道はゆったりしている住宅地と公園が続き、牧歌的な気持ちになります。また、私の先に降車する乗客が一人一人「ありがとう」と運転手へ声をかけて降りていました。ホテル前のバス停に近づくと運転手が「ここだよ」と親切に教えてくれ、こうした応対は疲れた旅人の私にとっては助けになりました。

フレンドリー、便利、自然に囲まれている、これがヴィクトリア市の姿です。長期海外研修に挑む学生は多くの不安を抱えながらスタートをきると思います。しかし、ヴィクトリア市を取り巻く環境は新生活の適応に力になります。ヴィクトリア大学内にある語学学校の学習環境も心強いです。校舎は近年に改築され、「壁なし構造」の広い空間で学生は多彩な学習に取り組むことが出来ます。授業を受けていない学生は地元のボランティアと会話を楽しみながら学ぶことができます。また放課後はヴィクトリア大学生と一緒にクラブ活動にも参加できると在学中の学生に教えてもらいました。

現在提供されているヴィクトリアでの長期海外研修は３カ月から５カ月の間という短い期間ですが、英米学科の学生にとっては海外生活という貴重な体験が、好条件の中で遂行され今後の有益に繋がるプログラムだと再確認することが出来ました。

空から見るヴィクトリア大学のキャンパス（まるで公園みたい！）

新入生代表宣誓

渡邊遥香さん（福岡県立北筑高等学校出身）

新入生代表宣誓の朗読を英米学科facebookにアップしました。

https://www.facebook.com/kgueibei/?view_public_for=812636102129436

本来であれば入学式で読み上げるはずのものでした。残念です。

履修相談会が行われた際に、図書館で朗読してもらいました。以下最後の部分を掲載します。

現在、新型コロナウイルスが流行しており、様々な分野で影響が出ています。世界中で行事が中止または延期され、今年の夏に開催予定だった東京オリンピックも、先日延期が発表されたことは皆さんの記憶にも新しいことと思います。さらには、人手や物質の不足により医療崩壊が危惧されていること、多くの国々で経済活動が制限されて失業者等が増え、過去最大規模の経済政策が必要になっていることなど、前例のない大きな問題に直面しています。このような問題に直面した時、私たちは「自分には無理だ」「自分がやることではない」と思って諦めるのではなく、自ら進んでその問題に取り組み、たとえ、一人では解決できない問題だったとしても、皆と共に考え、協力し合いながら仲間と解決していかなければならないと思います。

きみと未来をつなげる
クマガク

編集人　塩入　すみ（英米学科長）
〒862-8680　熊本市中央区大江2-5-1
TEL: 096-364-5161（代表）　Mail: shioiri@kumagaku.ac.jp